

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4579">http://hdl.handle.net/10502/4579</a>

## 26 乳ぬすつとの鼻印

第二十六日め（四月十日）

南家で朝をむかえる。

午前五時半、チョルム姉さんの起床。昨日災難にあった子ヤギに哺乳びんで牛乳をあたえて、実母ヤギのもとに放った。

どこの家でも、朝食はおなじ。乳茶に煎った黍をうかせ、かたく乾燥した乳製品をひたす。朝食のころになると、もう子どもたちがやってくる。となりのリンチェン家の小さな娘たちである。彼女たちの髪の毛を、毎日、おばにあたるチョルム姉さんがゆう。

そうじをすませて、チョルム姉さんは小包をつくりはじめた。きょうは、彼女の弟リンチェンドルジが、会議のためにソムの中心地に向く。そこには、彼女の次男坊が寄宿舎通学をしている。その子にとどけてもらうために、着替えの衣服とおやつをつつんでいるのだ、という。

チョルム姉さんは、子どもを生んだことがない。その意味では、母にはならなかった人である。しかし、彼女はまぎれもなく母なのであった。養子の次男に小包をつつむその姿は、母としてだれにもひけをとらない母であった。生んで母にならなくとも、母でありうる。母になることと母であることは、かならずしも一致するものではないことを、彼女の生きかたがおしえてくれる。

午前九時、リンチェン兄が出馬する。チョルム姉からうけとった風呂敷包は、ウマの鞍にむすばれている。鞍にぶらさがっているガンザガとよばれる革紐にしっかりくくりつけられている。

チョルム姉さんに髪の毛をととのえてもらった娘たちは、全部で四人。八歳をかしらにするリンチェン兄の三人の娘と、エルデニ姉の一人娘と。彼女たちの遊び相手になることが、ここでのわたしの役割になる。

小さな娘たちは、わたしに日本の歌をせがむ。『春が来た』をわたしが口ずさむと、意味をたずねて、ほんのしばらくのあいだにすっかりマスターしてしまった。四人が手をつないで、『春が来た』を日本語でうたいながら、モンゴルの春の風にふかれている。遠くには、ラクダの群れがみえた。

ラクダの群れは一直線の列をなして、東方へすすむ。最後尾をゆくのが、種オスラクダであることは一目でわかる。ひとまわり大きいからである。コブも大きいのに、たれさがってしまっている。なるほど、あれが、冬の交尾期に力をつかいはたした姿なのであった。

チョルム姉さんは、

「おいしいものをわたしのところで食べていけ」

そういって、昼食にボーズをつくってくれた。ボーズとは、蒸してたべる肉餃子である。モンゴル人も、漢族のように正月は餃子でいわう。ただし、水餃子でもなく、焼き餃子でもない。蒸しものであり、主体はヒツジ肉である。貯蔵された肉もそろそろ尽きようというこの時期に、ボーズはとびきりのごちそうである。レシピーはつぎのとおり。

まず、ヒツジの肉をきざみ、少量のネギと塩で風味をつける。日本で入手できるヒツジの肉は、くさみがつよいので、シヨウガやニンニクをすこしつかうとよい。ちなみに、日本でたべるヒツジの肉をモンゴル人は種オスだろう、と推量する。実際には種オスではないのだが、それほどくさいということ



ポーズとよばれる肉まんづくり

ある。具はこれでできあがり。皮のほうは、小麦粉を水でといて練り、しばらくねかせて小口にしておく。餃子の皮くらいの大きさで、やや厚めにまるい皮をつくる。大匙一杯分ほどの具を、一枚の皮でくるむ。つつみかたは、人によって異なるが、餃子よりもむしろシュウマイにちかい。小さな茶巾寿司のようにくるむ。左手に具入りの皮をのせたら、右手の親指に皮の一部をあてがい、そこを起点として固定し、人さし指と中指で皮の端をたぐりよせるようにして、つつみあげる方法が、モンゴル風である。これをいくつもつくっておいて、一気に蒸しあげる。皮のなかからとびだすヒツジ肉の脂をこほさないように、吸うようにして食べるのが、モンゴル風である。醬油、酢などのつけ汁をもちいてもおいしい。

ポーズもまた、ヒツジ肉のうまみをひきだした、おいしいごちそうである。季節がらめずらしいこの料理をたらふく食べて、北の自家へもどった。

午後二時。汗ばむほどの陽気である。温度計は十九度にまであがっている。

本家では、アバガ・マームがすでに二つめのお経も読みおわり、三つめにとりかかっていた。ほんのしばらく留守をしていたあいだにも、いろいろなことが生じたらしい。分家の嫁サラントヤーの説明によれば……。

昨夕、またもや母になりきったヒツジが発見された。母子群のなかに入れられたヒツジが、実はまだ出産していないことがわかった。出産が近づいたために、すっかり母親気分になって、よその子ヒツジをつれてあるいたのである。けさがた、放牧に出発するまえに、群れのなかから子ヒツジの本当の母をさがそうとしたが、みつからない。子ヒツジのからだは大きく、双子でもなさそうである。その結果、もう一匹のみなし子ヒツジが発生してしまった。このみなし子ヒツジの世話は分家にわりあてられた。なぜなら、すっかり母親気分になっていたヒツジが分家のものだったので、事態の責任はすべて分家にとることになったからである。

いっぽう、群れ本隊のなかでは放牧からの帰途、一頭のヒツジがメイメイないている。牧地へもどつてみると、子ヒツジの死体があった。子をもとめていないのである。乳もあるし、体格もよい。まさに養母にうってつけである。分家のヒツジである。これをあの黒鼻オンチンの養母にすることになった。もう一匹のみなし子ヒツジよりもまず、分家に分配されて面倒をみなければならなかった以前からのみなし子ヒツジのほうに、さきに養母をあてがってやるのである。

これで、いよいよあのみなし子ヒツジたちは、双方ともに養母をえることになる。おなじ日に生まれ、まるで双子のように同時にみなし子ヒツジになった二匹。母がいなかったために母子群のなかをうろつくわびしさも、乳をこっそり飲もうとするずうずうしさも、二匹はいつも共有していた。しかし、四月七日

ごろから運命の明暗がはつきりわかれたかにもえた。養母をえて本家にひきとられた白鼻のほうは、母子群のなかにあっても、しっかり養母につきしたがって、はぐれずに乳を飲むようになっていた。それなのに、黒鼻のほうは、かりそめの乳母のあいだをたらいまわしにされ、母子群のなかであいかわらず、うろろうしていたからである。きょうはまだ、いまのところペーリングされたにとどまる。暗室ペンのなかで二頭つきりにされた。まだ、養母ヒツジは養子ヒツジに授乳をゆるさない。そこで、とりあえず他の二頭のヒツジから哺乳しておき、明日あらためて養子縁組がとりおこなわれることになった。たぶん成功するにちがいない。子をうしなつてメイメイなくようなヒツジだったのだから。モージがいうには、

「あんなふうに鳴くのは、よい母の証しだ」そうだ。

午後四時。いつもよりはやくウシの搾乳がおこなわれた。一時間後、しぼった牛乳は、夕食になってあらわれた。乳麴だったのである。スーテイ・メントールとよばれるもの。肉うどんとおなじ要領で、麴をつくる。肉のだし汁のかわりに、牛乳をつかう。沸騰させた牛乳に砂糖を少々くわえ、そこに麴をいれて、ゆがいてできあがり。最後にバターをくわえると、いっそう美味になる。胃にもたれるが、めずらしいごちそうである。牛乳というものは、乳製品の原料であり、保存食になるものであって、そもそもただちに消費してしまうものではない。それをいきなり消費してしまうのだから、相当のぜいたくなのである。

おとといもまた、そんなぜいたくがあつた。桶のなかにたくわえられた酸乳をそのままのままでしまつたのである。酸乳は、さらに発酵させて乳製品をつくる原料であり、チャガーとよばれる。それを食間のおやつとして、飲んだ。

このようなぜいたくな乳の消費は、アバガ・マームへの接待なのであった。そのおこぼれをわたしはちようだいする。モージはそのことを、

「ヒシグである」

すなわち恩恵であるといった。

マームがきてからというものの、乳のぜいたくな消費ばかりでなく、食事そのものにもバラエティがでてきた。おとといの昼食も、肉うどんではなく、「シャルピン」とよばれる焼き餅であった。具と皮はポーズとおなじだが、それをお好み焼きのようなかたちにして焼く。やはり、勝手にやってきた居候と、招来されてきた賓客とでは、もてなしがちがうものであるらしい。ヒシグがあるから、かろうじてひがむ必要がなかった。

午後五時、はやくも夕食をおえる。つづいて夕方の哺乳補助作業がはじまる。ヘレムのなかは、母子群でいっぱい。ずいぶんふえたものだ。子だけで百をこえているのだから、母子双方をあわせると二百をこえる。もう、わたしの個体識別能力は限界にきていた。ただ、これまで哺乳を補助してきたものならみおほえがある。みていると、乳をぬすみ飲みしている子畜がたくさんいる。どの乳ぬすつとも、みおほえのある子畜である。乳ぬすつとたちは、哺乳補助をしているさいにも、おこぼれにありつこうとやってくる。哺乳を補助するときのじゃまものにもなっている。それで、

「こいつもぬすつとだわ」

と少々きらわれる。トヤアがわらいながら、

「どろほうの先生がいるから」

といった。乳ぬすつとの先生といえは、エルデニチメグのことである。彼女はだれよりも頻繁に哺乳を介添する。寄乳の回数が多い。すこし乳の飲む量がたりないと判断すると、すぐに乳の出のよさそう



乳ぬすつとの鼻印

なメスにあてがう。頻繁に哺乳のチャンスにあたえるので、そのつど正しい哺乳の姿勢などをとらせる余裕がない。母畜の背後から子畜をつっこむというもつとも安直なスタイルをとる。こうして養育された子ヒツジ・子ヤギは、背後からのびよるタイプの乳ぬすつとにそだつ。哺乳タイムに、よその母の下腹部に背後からアタックするぬすつとたち。そのほとんどがエルデニチメグの子畜であった。彼女の介入行為こそがそのような行動様式をはぐくんたのである。

母畜の背後から乳をのもうとしのびよると、ぶあつい尾がじゃまをする。脂肪尾とよばれるざぶとんのようなしっぽが障害物となる。この障害物には、きまって糞尿のしみがついていて、オシッコやウンコのしみをかいくぐるとき、乳ぬすつとたちの鼻面にそのしみがつかないはずはない。かれらは、いつもよごれた顔をしている。「乳ぬすつとマーク」が鼻面についているのである。どろぼうの先生であるエルデニチメグ姉さんによって、おすみつきの乳ぬすつとにそだつのであった。

夜半、南南西の風が強くなってきた。星が少ない。また悪天候に転じなければよいが。